

# 近衛前久(龍山)詠『五十首和歌』関連資料 解題と翻刻(下)

大 谷 俊 太

陽明文庫所蔵一般文書中の、近衛家十六代当主、近衛前久（天文五 1536～慶長一七 1612、享年七十七、法号、龍山）が慶長十二 1605 年の夏に詠じた『五十首和歌』に関わる詠草類を翻刻する。

関連資料のうち、まとまった内容と分量を持つものは以下の八点である。

- [A] 「龍山公五十首御詠草」(一般文書目録番号 59127、以下同じ)
- ・折紙三紙。仮綴。写本。一冊。前久自筆。貼紙による推敲多し。59126～59129の包紙一紙、上書「四ク、リ紙数十六枚」。
  - [B] 「後陽成院宸筆御消息」(32962 『宸翰英華』五六九)
    - ・折紙一紙。後陽成天皇自筆。縦29.4糎×横47.2糎。32962～32964の包紙一紙、包紙上書「後陽成院勅書 三枚」(前久筆)。
  - [C] 「前久公御詠草」(第一丁～第三丁、59177)
    - ・袋綴、仮綴。半紙本。写本。一冊。全十七丁、うち二丁白紙。前久自筆。縦25.2×横19.9糎。外題「龍山」。

- 〔D〕「後陽成院宸筆御消息」(32963・32964)『宸翰英華』五七〇)  
 ・折紙二紙。後陽成天皇自筆。縦32.1㎝×横16.2㎝。  
 〔E〕「前久公御詠草」(第四丁以降、59177)  
 ・Cに同じ。  
 〔F〕「和歌」(76059)  
 ・袋綴、仮綴。半紙本。写本。一冊。前久自筆。全十六丁。縦26.4×横19.4。  
 〔G〕「龍山公五十首御詠草」(59126)  
 ・折紙三紙。仮綴。写本。一冊。前久自筆。縦18.5㎝×横5.8㎝。  
 〔H〕「五十首」(77705)  
 ・袋綴、仮綴。半紙本。写本。一冊。前久自筆。全十六丁。遊紙なし。縦27.8㎝×横20.2㎝。

先ず、五十首和歌全体の本文が記されている詠草三点(A・G・H)を、その成立順に上段から下段へ三段組で、推敲の過程がわかるように、対照させて翻字する。猶、Aのうち十首には貼紙による推敲がなされているが、貼紙の下の文字を五十首和歌の後にまとめて翻字する。以上、【翻刻Ⅰ】

次に、後陽成天皇と前久との間で問答が交わされた和歌は、五十首のうち、1春霞・2氷解・3嶋霞・4河辺梅・8遊絲・10樵路躑躅・15夏草・18萩半綻・23月下遊士・28落葉驚夢・32市歳暮・41寄名所湊恋・44石清水の十三首であるが、その十三首の各歌ごとに、A～Hの関連部分を抜き出しまとめ掲げる形で翻字する。【翻刻Ⅱ】

さらに、E『前久公御詠草』の十三丁～十六丁に記される「題をまはず様」「本歌取様之事」、A～H以外の和歌の覚

書等の関連資料九点（「前久公筆書状等」39024・39032・39035・39044・39050・39064・39086・39090・39100）を翻字する。【翻刻Ⅲ】

最後に、F『和歌』の冒頭部の序に当たる文章、D「後陽成院宸筆御消息」の最後の二項目を翻字する。【翻刻Ⅳ】

本稿では、（上）（京都女子大学国文学会『女子大國文』一五六号、二〇一五年二月）に引き続き、【翻刻Ⅱ】の「15夏草」以下の記事、【翻刻Ⅲ】、【翻刻Ⅳ】を収載する。

（凡例）

- 一、翻字は原則として原本表記の通りとする。
- 一、旧字体・異体字・合字は通行の字体に改めた。
- 一、句読点・並列点を施し、清濁を分かった。
- 一、挿入語句は本文に組み込み、見せ消ちの文字は網掛けで示した。
- 一、C・Eの朱筆部分は楷書体で示した。
- 一、虫損等による判読不能箇所は□で示した。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

## 【翻刻Ⅱ】

## 15 夏草

【A】「龍山公五十首御詠草」(59127)

夏草

／＼わかなへにさとのさかひもわかぬまで  
色／＼に春みし花もちこちのひとつにしげる野べの夏草

【B】「後陽成院宸筆御消息」(32962)『宸翰英華』五六九)

夏草

此御うた草花か。

【C】「前久公御詠草」(59177)

夏草

此御哥草花歟。

色／＼に春みし花もち近のひとつにしげる野べの夏草

草花の事、草花とばかり候へば秋に成申候。春の詞入候へば春にて候歟。春の発句に

すきのこせ草も花さく小田の原

名もしらぬ小草花さく川辺哉

是は秋の発句に候。

【D・E】なし

【F】「和歌」(76059)

夏草

色々に春みしはなもをちこちのひとつにしげる野辺の夏草 龍山

此御哥草花候歟。

仰御ふしんにて候。

一 草花の事、草花とばかり候へば秋にて候。春の詞入申候へば春になり申候歟。仕やうによるべく候哉。たと

へば春の草花に、

すきのこせ草も花さく小田のはら

又秋の発句に、

名もしらぬ小草花さく小田のはら

川辺哉

右の愚詠は、色々に春みし花もをちこちのひとつにしげる野辺のなつ草

夏にて候歟。しかれども夏草のうた如此改申候。

わかかなへに里のさかひもわかぬまでひとつにしげる野辺の夏草 龍山

〔G〕「龍山公五十首御詠草」(59126)

夏草

わかかなへに里のさかひもわかぬまでひとつにしげる野辺の夏草

おなじみぢりゆの  
ひとつに茂る  
ひとつの色なる

〔H〕「五十首」(77705)

夏草

わかかなへに里のさかひもわかぬまでひとつ色なる野辺の夏草

## 18 萩半綻

〔A〕「龍山公五十首御詠草」(59127)

萩半綻

ふきとをるきりのまがきの秋風にはぎのにしきぞなかば色めく  
 萩のまがきをこえておなじ枝にまだき色ある花もこそさけ

ほころぶ

〔B〕「後陽成院宸筆御消息」(32962)、『宸翰英華』五六九)

萩半綻

こえてと候ところき、かね申候。又半の字かんようにて候や。

〔C〕「前久公御詠草」(59177)

萩半綻

こえてといふところき、かね申候。又半の字かんようにて候や。

萩の哥別昏に申入候。

(頭書部分に) 小萩原籬をこえておなじ枝にまだき色なるはなもこそさけ

(別紙)

萩半綻

こはぎはらまがきをこえておなじ枝にまだき色なる花もこそさけ

おなじ枝のまがきをこえてさきたるは、なかばのほころびたる風情を心にもたせて仕候。又まがきをこえぬ萩は  
 さきたるもさき申さるもみえず候躰、まづまがきをこえてさきたるは、まだき色なる、萩のはなはやくき色候  
 歟。しかればなかばほころぶ躰、心にあるべく候歟。愚意の趣如此。御ふしんにつき不申入候もいかゞと、不顧

憚申上候。但、御不審の哥どもをばいづれも仕改申候。

吹とをる霧のまがきのあき風にはぎのにしきぞなかば色めく

みえたるさまながら、霧のまがきは霧のかこひたるを申候。秋風吹とをるひまより、はぎのにしきの色めく風景、

なかばの躰可有御座候歟。まへの哥は古哥に、

まだよひにねたるはぎかなおなじ枝にまだきをきる露もこそあれ

萩半綻といふ題の哥にては無御座候へ共、心をもたせ哥のよせに申候へども、中くきこえ不可申候。されども愚意をば申上候。

〔D〕〔E〕なし

〔F〕「和歌」(76059)

萩半綻

秋はぎのまがきをこえておなじ枝にまだき色ある花もこそさけ 龍山

こえてといふところ、き、かね申候。又半といふ字かんようにて候歟。

仰尤存候。これは猶以きこしめしかねられ候べく候。すまぬ哥とわれながら存候。されども仕たる心は、まがき

にかこひをきたる萩のまがきまがきをこえて色のおなじ枝にまだき色のさきたる風情は半綻のたぶんまがきをまがきをこえて色のさきたる風情は半綻のはなおもげにこえたるは半の躰いさ、かこもり可申候歟。まだき色

ある萩は、はやくさきたる萩なるべきかと心にもたせて申候。これ又改申候。古哥に、

まだよひにねたるはぎかなおなじ枝にまだきをきる露もこそあれ

このうたのよせ申候と存初一念迄如此。是又改申候。

ふぎとをるきりのまがきの秋風にはぎのにしきぞなかば色めく 龍山

みえたるさまながら、きりのまがきは霧のかこひたるを申候歟。秋風のふきとをるひまより、はぎのにしきの色めくは半ほころびたる風景なかばの躰可有御座候歟。新古今に、

又もこん秋をたのむのかりだにもなきてぞかへる春の曙 後京極  
面にはみえねど、心にもたせ候。後朝恋にて候。

〔G〕「龍山公五十首御詠草」(59126)

萩半綻

ふきとをるきりのまがきの秋風にはぎのにしきぞなかば色めくあぶ

〔H〕「五十首」(77705)

萩半綻

ふきとをるきりのまがきの秋かせにはぎのにしきのなかば色めく

23 月下遊士

〔A〕「龍山公五十首御詠草」(59127)

うたふしひつ、本月の夜すがらたをやおの舞のあふぎはをくひまぞなき  
よとくもにくめる情にたはれおの月のふくるもおもほえぬ袖

〔B〕「後陽成院宸筆御消息」(32962)『宸翰英華』五六九

月下遊士おのちのゆうし

たおやをの所ふしんに候。遊士アソビヲ、此二つならではなく候。遊女はたをやめと候へども、遊士はちと心ちがひ



申候歟。

〔C〕「前久公御詠草」(59177)

月下遊士のちのゆうし

たをやをの所、ふしんに候。たを遊士れを、あそびを、此二つならではなく候。遊女はたをやめと候へども、遊士ゆうしはちと心ちがひ申候歟。

たをれを、たをやを、筆のあやまりにて候。迷惑仕候。よと、もに情をくみてあそびをの月のふくるもおもほえぬ袖、如此仕候。

〔D〕「後陽成院宸筆御消息」(32963・32964、『宸翰英華』五七〇)

一 遊士を又たをれおと筆の御誤、度々の御楚忽、御参の時、以直談笑可申候。たはれを、仮名遣此分候哉。そとすり改られ候て可然候。

〔E〕「前久公御詠草」(59177)

一 遊士を又たをれおと筆の御誤、度々の時、以直談笑可申候。たはれを、仮名遣此分候哉。そとすり改られ候て可然候。

尤々、毎々のそこつ、若氣之至、致迷惑候。一咲也。

〔F〕「和歌」(76059)

月下遊士

うたひつ、月の夜すがらたをやおれのまひのあふぎはをくひまぞなき 龍山  
仰に、たをれを、あそびを、此二つではなく候。遊女はたをやめと候へ共、遊士はちと心ちがひ申候歟。

たをれを、たをやとかき申候事、筆のあやまり、そこつのいたりめいわく仕候。

よと、もになさけをくみてあそびをの月のふくるもおもほえぬ袖 龍山

如此あらため直申候。

〔G〕「龍山公五十首御詠草」(59126)

月下遊士

よと、もに情をくみてあそびをの月のふくるもおもほえぬ袖  
うたひつ、月の夜すがらたはれおの舞のあふぎはをくひまぞなき

〔H〕「五十首」(77705)

月下遊士

よと、もに情をくみてあそびをの月のふくるもおもほえぬ袖

28 落葉驚夢

〔A〕「龍山公五十首御詠草」(59127)

落葉驚夢

山風のねやの板間に音そひて夢おどろかす木の葉ちるなり

〔B〕「後陽成院宸筆御消息」(32962)『宸翰英華』五六九)

落葉驚夢

木の葉、木葉、の、字なきがよく候か。

〔C〕「前久公御詠草」(59177)

落葉驚夢

木の葉、木葉、の、字なきがよく候か。

尤存候。為後学と忝奉存候。梅花の類候歟。

〔D〕なし。

〔F〕「和歌」(76059)

落葉驚夢

山かぜのねやのいたまにをとそひて夢おどろかす木の葉ちる也

龍山

仰、木の葉、木葉、の、字なきがよく候歟。

尤存候。為後学とかたじけなく奉存候。梅花など、同前のの、字ににをてよばず候歟。

此哥、の、字ばかりにて候

故、愚詠あらため申さず候。

〔G〕「龍山公五十首御詠草」(59126)

落葉驚夢

山風のねやの板間に音そひて夢おどろかす木の葉ちるなり

〔H〕「五十首」(77705)

落葉驚夢

山風のねやの板間に音そひて夢おどろかす木葉ちるなり

## 32 市歳暮

〔A〕「龍山公五十首御詠草」(59127)

## 市歳暮

ゆく  
○としもはやけふをかぎり家と暮ふかくはつかねをき  
としなみのよりくるすゑはすみの江やあさいち人の袖つどふらん

〔B〕「後陽成院宸筆御消息」(32962) 『宸翰英華』五六九)

## 市歳暮

袖の市柴とも哥によみ候や。連哥ならではき、候はぬ歟。

〔C〕「前久公御詠草」(59177)

## 市歳暮

袖の市柴とも哥によみ候や。連歌ならでは聞候はぬ歟。

古哥ニ、山がつの袖の市柴とりくにかへる家路に雪はふりつ、

連哥と申候も哥より出申候。哥によみ不申候事は連哥にも不仕候。宗祇哥ニ、いとゞしくおもきがうへの深雪哉

山もと遠き袖の市柴、宗祇ハ連哥しにて候へ共、古今伝受候哥道者候歟。

〔D〕「後陽成院宸筆御消息」(32963・32964) 『宸翰英華』五七〇)

一袖の市柴、宗祇證歌尤にて候。

〔E〕「前久公御詠草」(59177)

一袖の市柴、宗祇證歌尤にて候。

〔F〕「和歌」（76059）

市歳暮

としもはやけふをかぎりとかへにつかねをきたる袖のいちしば 龍山  
仰、袖の市柴とも歌よみ候歟。連歌ならではき、候はぬ歟。

連哥と申候事も哥より出申候へば、うたによみ申さざる事は連哥にも不仕候。古歌に、

山がつの袖の市柴とりぐにかへる家路に雪はふりつつ

是を本哥候哉、宗祇哥に、

いとゞしくおもきがうへの深雪かな山もととをき袖のいちしば

宗祇は連哥しにては御座候へ共、古今なども致覚悟、哥連歌ともに先達のやうに申習候歟。

〔G〕「龍山公五十首御詠草」（59126）

市歳暮

としなみのよりくるすゑはすみの江やあさいち人の袖つどふらん

〔H〕「五十首」（77705）

市歳暮

としなみのよりくるすゑはすみの江やあさいち人の袖つどふらん

41 寄名所湊恋

〔A〕「龍山公五十首御詠草」（59127）

くくくく湊く (寄名所湊恋)  
 うらみゆへ  
 せきあへぬ袖の涙はみなと河うらみはてこし中となりつ、  
あさはかになる中ぞあやなき

〔B〕「後陽成院宸筆御消息」(32962)、『宸翰英華』五六九)

寄名所湊恋

みなと川、あとさきへのえんすくなく候や。

〔C〕「前久公御詠草」(59177)

寄名所湊恋

みなと川、あとさきのえんすくなく候や。

せきあへぬ袖の涙はみなと川あさはかになる中ぞあやなき

〔D〕・〔E〕なし。

〔F〕「和歌」(76059)

寄名所湊恋

せきあへぬ袖のみだはみなと川うらみはてこし中となりつ、 龍山

仰、みなと川、跡さきのえんすくなく候や。

此愚詠尤おもしろからず候へ共、愚意申候ば、ニアタル心ハせきあへぬ袖の涙のことくしきはみなと川のやうなると申心に

とりなし候たとへに申候。下の句のうけやうは、みなと川はうみの末にて候へば、あきくあるべく候はんを、恨を浦見はてたるこゝろにとりなし、恨みはてたる中ぞあやなき、無益二心にしたごゝろをもたせて申候。さやうにはきこえかね可申候歟。せきあへぬ袖の涙のひまなくおつるは、さながらみなと川浦のはてなれば、うらみは

てきもての中となりゆきたるこ、ろに申候。雖然如此あらため直申候。改申候哥は、うらみゆへ袖におつる涙は  
こし  
みなど川、えんはあきはか、あまき心ニ申候。

うらみゆへ袖のなみだはみなど河あさはかになる中ぞあやなき 龍山

みえたるさまばかりにて候。右に申入候おなじこ、ろにて御座候。候敷。下句ノウケヤウ、同。えんハ、湊川海ノスエ

ナレバ、アサクアルベク候間、アサハカトリナシ申候。

〔G〕「龍山公五十首御詠草」(59126)

クック湊ク(寄名所湊恋)

うらみゆへ袖の涙はみなど川あきはかになる中ぞあやなき  
こしにのみこす つゐのよるべもたのみすくなき

〔H〕「五十首」(77705)

寄名所湊恋

うらみこし袖になみこすみなど川つゐのよるべもたのみすくなき

44 石清水

〔A〕「龍山公五十首御詠草」(59127)

石清水

おとこ山さかゆくかげの石清水にこらぬ神の心をぞしる

〔B〕「後陽成院宸筆御消息」(32962)『宸翰英華』五六九)

石清水

神の慮候や。神の心ともかき候や。

〔C〕「前久公御詠草」(59177)

石清水 男山さかゆくかげの石清水にごらぬ神の心をぞしる  
神の慮、神の心ともかき候や。

神慮勿論候。又神の心とも御座候歟。十代集に、

あふひ草てる日は神のこゝろかはかげさすかたにまづなびくらん

其上、神道六根清浄大祓に相見候心の字候歟。新古今、

けふまつる神の心やなびくらんしでに波たつさほの川風

〔D・E〕なし。

〔F〕「和歌」(76059)

石清水

おとこ山さかゆくかげのいはし水にごらぬ神の心をぞしる 龍山

仰に、神慮、神の心ともかき候や。

神慮カミコロ 神の慮心の字にはあるまじく候哉。 仰尤存候。

神慮、神の慮、勿論候歟。

神の心、心の字もかき申候とみえ申候。

十代集<sup>二</sup>

あふひ草てる日は神の心かはかげさすかたにまづなびくらむ



又新古今に

けふまつる神の心やなびくらむしでに浪たつさほの川風

右兩首ともに、神の心、心の心をかくとみえ申候。其上、神道六根清浄大祓にも御らんなさるべく候心の字とみえ申候。六根大祓にも一所二所にも無之候。あまた此時は心の字とみえ申候。哥書などにはかなづかひもまぎれ可申候歟。神道六根清浄大祓に相見申候時は、可有如何御事候哉。

【G】「龍山公五十首御詠草」(59126)

石清水

男山さかゆくかげのいはし水にごらぬ世々のためし成けり

【H】「五十首」(77705)

石清水

男山さかゆくかげのぞいはしみづにごらぬ世々のためし成ける

【翻刻Ⅲ】

【E】「前久公御詠草」(59177 一四～一七下)

夫哥は題をまはず様習在之。又、面題の心一切不見、下心にてもたするよみやうある也。秘事口伝也。定家卿秘広抄に被注之。初心の人不習得しては努々不可成道也。

古今さゝのはにふりつむ雪のうれを、もみもとくた下ちゆく我さかりかも

夜くたちにねざめてをれば川をとめ心もしのになく千鳥かな

口伝の哥也。

古今  
あは雪のたまればかてにくだけつ、わが物おもひのしげきころ哉

むら鳥のたちにしわが名いまさらなことなしぶともしるしあらめや

あぶくまに霧たちわたりあけぬとも君をばやらじまてばすべなし

あゆのかぜいたく吹らし波のあまのつりするをぶねこぎかへるみゆ

ますらおのともものぞめきになぐさむる心もあらんわれぞくるしき

ひろせ川袖つくばかりあさきせや心ふかめてわがおもふらん

七夕の袖つくよるのあかつきは川瀬のたづもなかずともよし

新古  
字面にはみえねども、てにはにて恋の哥になる事

後朝恋  
又もこん秋をたのむのかりだにもなきてぞかへる春のあけほの 後京極

千五百番  
みちのくのあらの、まきのこまだにもとればとられてなれゆく物を 俊成卿

右両首ながら恋の哥也。 口伝

古今  
しら波の跡なきかたにゆくふねも風ぞたよりのしるべなりける

しるべせよ跡なき波にこぐふねのゆくゑもしらぬやへのしほ風 式子

是又面には恋のことばなけれども、恋の哥也。右の哥ども口伝也。

本哥取様之事

古今  
春の色いたりいたらぬ里はあらじさけさかざる花のみゆらん

秋風のいたりいたらぬ里はあらじたゞわれからの露の夕ぐれ

をとめごが袖ふる山のみづがきのひさしき世よりおもひそめてき

古今をとめごが袖ふる山の玉かづらみだれてなびく露の夕暮

春たつといふ斗にやみよしの、山もかすみてけさはみゆらん

古今よしの山雪に霞の春たつとけふばかりなる朝ぼらけ哉 為広

有明のつれなくみえし別よりあか月ばかりうき物はなし 本哥歎

古今有明のつれなく見えし月出ぬ山時鳥まつよながらに 頓阿

みるくも霞ふきとく朝風にのこれる雪の山しろくみゆ 頓阿

十代集之内むすぶ手のしづくくににこる山の井のあかでも人にわかれぬる哉 本哥歎

同むすぶ手に影みだれ行山の井のあかでも月のかたぶきにけり

同岩間より落くる瀧たきの白糸はむすばで見るもすゞしかりけり

岩間より落くる瀧の白玉はひろふばかりも袖にすゞしき 招月

十代昨日までよそにおもひしあやめ草けふ我やどのつまとみる哉

十代昨日までよそにおもひし下荻の末葉の露に秋風ぞふく

山がつの袖の市柴とりかくにかへる家路に雪はふりつ、

哥道と申候事は、広き御事候歎。あまねく哥学を心がけ可申儀にて候哉。

39100 「前久公筆書状等」(写。堅紙。一紙。縦28.8釐×横10.5釐。薄様。前久自筆)

十代集 夏部九首めにあり

雪としもまがひもはてず卯花はくるれば月のかげかともみゆ

十 有明のつれなくみえし別より暁ばかりうき物はなし

同 有明のつれなくみえし月出ぬ山時鳥まつよながらに 頓阿

みるくも霞ふきとく朝風にのこれる雪の山しろくみゆ

むすぶ手のしづくににごる山の井の井のあかでも人にわかれぬる哉

むすぶ手に影みだれ行山の井のあかでも月のかたぶきにけり

同 岩間より落くる瀧の白糸はむすばでみるもすゞしかりけり

岩間より落くる瀧の白玉はひろふばかりも袖にすゞしき

昨日までよそにおもひしあやめ草けふわがやどおもほゆる哉のつまとみる哉

昨日までよそにおもひし下荻の末葉の露に秋風ぞふく

山がつの袖の市柴とりくにかへる家路に雪はふりつゝ

春たつといふばかりにや御芳野の山も霞でけさはみゆらん

芳野山雪に霞の春たつといふばかりなる朝ぼらけ哉 仍覚

朝霧にしとゞにぬれてよぶこ鳥みふねの山を鳴渡るみゆ 人丸

船出するおきつしほさゝる白妙の香椎の渡波たかくみゆ 家持

鳴のいる野沢の小田を打かへし種まきてけりしめはえてみゆ

いなみのは行過ぬらし天つたふひかさの浦に波たてるみゆ

さよなかと夜はふけぬらし鴈金のきこゆる空に月わたるみゆ

39032 「前久公筆書状等」（写。堅紙。一紙。縦25.8釐×横10.5釐。薄様。前久自筆）

十代集夏部九首めにあり。

雪としもまがひもははず卯花はくるれば月のかげかともみゆ

○有明のつれなくみえし別よりあかつきばかりうき物はなし 本哥歟。

有明のつれなくみえし月出ぬ山時鳥まつよながらに 頓阿

みるくも霞ふきとく朝風にのこれる雪の山しろくみゆ

むすぶ手のしづくににこる山の井のあかでも人にわかれぬる哉 本哥歟。

十代集之内  
むすぶ手に影みだれ行山の井のあかでも月のかたぶきにけり

同 岩間より落くる瀧の白糸はむすばでみるもすゞしかりけり

岩間より落くる瀧の白玉はひろふばかりも袖にすゞしき 招月

昨日までよそにおもひしあやめ草けふわがやどのつまとみる哉

十代  
昨日までよそにおもひし下荻の末葉の露に秋風ぞふく

○山がつの袖の市柴とりくにかへる家路に雪はふりつ、

草根集之内に有 招月

はしだてや夕日をはたすなみのうへにつばさいくむれさぎのとぶみゆ

湖上朝霞 定家

朝ぼらけみるめなぎさの八重霞えやは吹とくしがのうら風

あゆのかぜいたく吹らしなこのあまの釣する小舟漕かへるみゆ

むこのうみにはよくあらしいさりするあまの釣舟波のうへにみゆ

むこのうらの泊なるらしいさりするあまの釣舟なみまよりみゆ 人丸

○春の色いたりいたらぬ里はあらしさけるさかざる花のみゆらん

秋風のいたりいたらぬ里はあらしさわれからの露の夕ぐれ

をとめごが袖ふる山のみづがきのひさしき世よりおもひそめてき

をとめごが袖ふる山の玉かづらみだれてなびく露の夕暮

春たつといふばかりにやみよしの、山もかすみてけさはみゆらん

よしの山雪に霞の春たつといふばかりなる朝ぼらけ哉 仍覚

朝霧にしとゞにぬれてよぶこ鳥みふねの山を鳴渡るみゆ 人丸

船出するおきつしほさる白妙のかしゐの渡波たかくみゆ 家持

鳴のゐる野沢のを田を打かへし種まきてけりしめはえてみゆ

いなみのは行過ぬらし天つたふひかさの浦に波たてるみゆ

古今

さよなかと夜はふけぬらしかりがねのきこゆる空に月わたるみゆ

此哥共いづれも過半十代集名よせに御座候。又、べちにも御入候。

3904 「前久公筆書状等」(写。豎紙。一紙。縦28.8釐×横39.9釐。前久自筆)

とめのあんもん

夏草

色く／＼に春みし花もちちのひとつにしげる野への夏草

草花の事、草花とばかり候へば秋に成候歟。春といふ字詞入申候へば、春の草花に成申候と哉らん承候。

すきのこせ草も花さく小田のはら 春の発句にて候。

名もしらぬ小草花さく川辺哉 是は秋の発句にて御座候。

わかなへにさとのさかひもわかぬまでひとつにしげるのべの夏草

如此改可申候哉。被加御詞可被下候。

神慮 カミコロ 神ノコ、ロ 神慮 神の心とも御座候歟。

とるやとる神のこ、ろのさかきばに 下句失念仕候。

39064 「前久公筆書状等」（写。豎紙一紙。縦25.8糎×横39.4糎。薄様。前久自筆）

二あひのあやをる水とみゆる哉梅の立枝のうつる川岸

よともにくめる情にたをれおの月のふくるもおもほえぬ袖

としも又くれぬるまゝに山本はあさいち人の袖つどふ也 なみもよりくるまゝになには江や

39090 「前久公筆書状等」（写。豎紙。一紙。縦26.8糎×横39.9糎。前久自筆）

ぜうは てんはせうみやうゐんへたづね申候よし候。たとへば、

一折 おる 手折 たおる たをる 手をる

あひをひ 相生 あひおひ あひおひとかなのときは、おひと申され候よし、ぜうは申候てのせんさくにて候つる。





くれなるににほふはいづらしら雪の枝もとを、にふるかともみゆ  
くれなるににほふがうへのしら菊はおりける人の袖かともみゆ

遊絲の愚詠の事、惣別哥くたくに御座候て、あしくくだけ申候やうには候へども、てにははくるしかるまじ  
く候歟。

風たえてかすみのひまにのどけくものきばをちかみいとあそぶみゆ

称名院仍覚哥に

春あさき野沢の草のしたもえにうへは氷をくたく玉水

同

今朝のあさけ霞ふきとく春風にみさほの松も色まさりけり

宗祇哥に

いとゞしくおもきがうへの深雪哉山もととをき袖の市柴

39086「前久公筆書状等」(写。堅紙。一紙。縦388糎×横511糎。小豆色楮紙料紙。前久自筆)

<sup>拾遺七</sup>神なびのみむろのきしやくづるらむたつたの川の水のごれる 高向

大納言公任卿撰之義、<sup>法皇</sup>花山院御自撰ト云々

下総 勝間田池

<sup>千載集</sup>いけもふりつ、みくづれて水もなしむべかつまたにちりやるざらん 二条天皇太后宮肥後  
<sup>言塵集</sup>うふねおほくくだすおりしもたきつせにやなくづれしてあゆよさばしる 顕仲

万葉四 名寄勅撰

大はらやこのいちしばのいちしろくわがおもふいもにこよひあひみる

名寄

あまぎらし雪もふらぬにいちしろくこのいちしばにふらまくをみん

山がつの袖のいちしばとりぐにかへる山ちに雪はふりつ、

此哥をとりて、宗祇

いとゞしくおもきがうへの深雪哉山本とをき袖のいちしば

39035 「前久公筆書状等」(写。 縦紙。 一紙。 縦33.5糎×横48.5糎。 前久自筆) 料紙左上、表書きに当たる箇所「古詠」とある。

新古今

春風の霞吹とくたえまよりみだれてなびく青柳の糸

十代集に在之

天原霞吹トク春風二月ノ桂モ花ノカゾスル

朝ぼらけ

末原霞ふきとく春風にみさほの松も色まさりけり 仍覚

十代集に在之

アフヒ草テル日ハ神ノ心カハカゲサスカタニマヅナビクラン

39050 「前久公筆書状等」(写。 縦紙。 一紙。 縦33.5糎×横48.5糎。 前久自筆)

春風のかすみ吹とくたえまよりみだれてなびく青柳の糸

十代集春部に在之

天の原かすみ吹とく春風に月のかつらも花のかぞする

みるくもかすみ吹とく朝かぜにのこれる雪の山しろくみゆ 頓阿

朝ぼらけかすみふきとく春風にみさほの松も色まさりけり 仍覚

## 【翻刻Ⅳ】

【F】「和歌」（76059、一―三二）

文学歌学世にすぐれさせ給へる君子のおはしますが、諸道にたづきはらせれ武芸給ひにいたるまでも、しろしめし侍らぬ事はなかりけり。こゝに数ならぬ世すて人ありけるに、五十首の御詠をあそはし拝覽させられ、おなじくよみたてまつれとありし被仰下により、とりあへず瓦礫高覧にそなへ侍りけり。其中御ふしんをたづね下され給ひて、愚意の趣をのこしたてまつらず、□□□□をかへりみず申上よとの仰なり。しきしまのみちをくはしくつとめおはしけるに、なにはのうらのよしあしによらず、あまねく猶きこしめさんとおぼしけるにや。亡父いさかも伝受の趣をもきこしめされ、たづね下さるゝにしたがひ、誠九牛の一毛、大海の一滴ほど覚悟をよばざること、石見のうみのあらゝ言上の處に、はまのまさごのかずゝこまやかに御念のいれられ被仰出ところ、もだしがたく存ながら、申上候もはゞかりなり、申上候はぬも、和哥両神の御納受正直のをきてを依奉存、憚をかへりみず、老眼老耄老草筆蚯蚓之跡、一かたならざる難堪不可如在之者歟。論語にも、子曰敏而好学不恥下問、是以謂之文。さながら此君とぞ申べけれ。就中、知之為知之不知為不知是知、おぼつかなくおぼしめされ候事をば、ありのまゝ、にたづね被下とみえさせ給ふは、此語にたがふ事なし。是則可謂聖人之君子者也。須管見愚智無智之上、如此言上も不可有正儀御事候。住吉大明神・玉津嶋大明神も正直順路のいましめ不浅候歟。此子細事旧たる義不及言上候。昔の先達も失念誤等は毎事在之由申つたふる也。古今にも七首誤在之与申習候歟。況すゑの世にはいよいよ不学して誤おほかるべき歟。たとへば、連歌はね字の発句に、ある人、

梅が、をきえあへぬ雪やにほふらん

此発句作者自慢被申故、至于時連哥匠宗祇も及斟酌、当座輕薄をもと、して、はねがたき上句とも不申ゆへに、此

発句名人ながらも越度に儀定すと申つたふるとぞ。同作者の句に

とをさとをのにくる、鐘のね

申候へ

かねのをと、こゑとこそは仕候、かねの音とはいかゞあるべきとて、後難に申けるとなん。君子大人へはをそれおほく申かぬる故なりと云々。過則勿憚改、名言と申習候歟。世間のとなへをき、侍りしかば、改めらるべけれど、しらせ侍らぬにや、末の世まで申けるとぞ。此道、此君子は御執心故善悪をたゞされ、御順路を専におぼしめされ候めす事、大切御名譽与存候故不願憚如此候。なるへし。聖廟の掟にも、

こゝろだにまことのみちにかなひなばいのらずとても神やまもらん

尤神慮も可有御納受御事与奉存候。宗養など朝暮拙老若輩之時分申聞候。上下之間にては誤悪事申かね候故、於公界越度後難に罷成候。口惜事候歟。別而たゞすべき事専一候。申にくき事を乍憚在様に申候事をば真実之御ためを存候与令分別可為忠節事候歟云毎に申候キ。

末ノ世二ハ、悪キ事ヲモ輕滔ヲ申、ホメ申候事、氣ニアヒ申候。邪路口惜事候歟。論語ニモ思無邪。

【D】 一、卷の名御相伝喜悦にたへかね申候。返々満足く。

(了)

【付記】資料の閲覧・翻刻を御許可戴きました陽明文庫長名和修氏に記して深謝致します。また、本稿は平成二五年度京都女子大学研究経費助成ならびに平成二六年度研究補助員助成による成果の一部である。